



巴里周辺 など

松島正幸

大体旅行記なんてものは面白いものじゃない。あるいは、かつてその地方を旅して来たことがあって、それを別な角度から、とらえられていて、こんな見方もあるものなんだなくらいに、考えるのがおちで、いろいろ自分で見た場所やら、名画をみた感激などを、どのように伝えたらいいものであろうか。

それはさておき、4月上旬のある夜、三雲兄の病床を慰めようと、田中夫妻、田辺三重松氏、山内氏、中根氏、われわれ夫妻などが、三雲宅に集って、その時、山内氏の8ミリ映画、ノートルダム・ド・パリと、オクターン・プロダクションの見事さには感心した。

音楽から解説まで入った、大したもの、これはもう素人離れのしたものであった。

どうも、この夜は三雲君の見舞を兼ねて、彼の隠し芸を、見せようというコンタンらしくもあった。

私もなれない写真機をあやつって、旅行先のあっちこちをいろいろ写して来たが、とても恥かしくて、人前に出せる代物じゃない。ただし私ののは、スライドである。

写真機を手にして思ったのだが、風景を描いてるくせとていうのか、簡単な素描でも、自分で描いたものは頭に色も形もこっているのに、写真に頼ったものは、全然頭にのらず、さて、これは何処だったかななどと、考えてしまう始末、やはり描くにきがる。

私は船で、香港、アデン、ジェッダ、スエズからカイロに寄り、スフィンクスやピラミッド、エジプトの美術館などを見て、イタリアのゼノア（コロンブスの

生地）に上陸、そこから汽車で巴里に入ったわけだ。

その船の1ヶ月は誠に楽しく、航空などの比ではない、時間があつたら、船の方を行く人々に薦めたい。海の色、山の形、街の変化を次第に深めつつ欧州に入るの、いろいろの意味で面白いと思う。

帰途は17時間余で、コペンハーゲンとアンカレッジにちょっと寄ったきりで、東京着。

確かに世界はせまくなった感じで便利で楽だけれど、正直味気ない。

さて、7月の巴里は、明るくさわやかで、7月14日の巴里祭の頃は、友達もできて、楽しい夜を過ごした。

山内君の言葉ではないが、新しい街に入る前夜、街の歴史やら、美術館などいろいろの案内書で調べのが楽しいという話だったが、古い歴史を秘めている巴里の町は静かで、独りで夜など歩いていると、自分の靴音ばかりが、コツコツと響いて、暗い城のような建物や、老いたる寺院が、そのまま私を歴史の中に、ひき入れて行くような感じにおそわれた。

人間は、誰も彼も孤独なんだ。この孤独を大切にしよう。巴里に来たのは、この孤独をじっくりと自分のものにするためではなかったかと、自分にいいきかせた。

巴里は御存知のように、たくさんの美術館やら画廊があつて、個展も次々に開かれ、それを見るだけでも随分勉強にもなるんだが、美しい景色を見ると、描きたくなるのも事実で、さてどうしたものかと、とまどう感じだった。

2、3年いても、てんで描かず立派な画論ばかりきかせてくれる友人もいたし、先ず遊ぶことから、ずっと遊んでいるのもいたし、正直、いずれもその人達の生き方で、決して悪いとは思わないし、それはそれでいいので、勉強なんてものは、他人にいわれてできるものでもないし、先ず自分なりに考えるより仕方ないものだと思う。絵も古いのから、新しいものまで、本物が沢山見られるのが一番有難かった。

私は田舎者だから、新しい感覚的なものをたくさん見せられたが、良いなあ、うまいなあと思っても、な

んとなく小味で、気がきいているところばかりが、眼について、心がついて行けなかった。古いのだろう。最も、5年とか、10年とか滞在していたら、この考え方も変化するだろうと思ってはみたが、急に新しく生まれ替るわけにも行かぬ自分を、今更どうにもならないだろう。

1年か半年でも、見事な転身をみせて、あつぱれ才能をみせる人もいるというのに、これじゃ仕様がな。

巴里には古い友人がたくさんいて、3年から10年余になるのもいて、みんな車を持っているので、この車であつちこち連れて行って貰ったのは本当に幸いであつた。

巴里はもちろんだが、巴里郊外の小さな町が、本当に立派で美しく、こうした田舎をみると、文化の水準というものが解るのだ。

ルーアン、モレー、モー、バルビゾン、オーベル、ポントワーズ、ドルーダン、ノルマンディ地方の都市、などにも何度か足をのぼした。ミレーのアトリエも、ゴッホの室もみた。セザンヌや、シスレー、ユトリロの描いた場所にも幾度か立った。

ベルン、バーゼル、チューリッヒなどのスイス地方にも旅行した。この方面の旅行で、セザンヌ、ゴッホの作品、クレー、ボドラー、ココシュカ、ムンク、ベックリンなどの大作品その他を数多くみた。

私は北方の作家に、特に共感を感じたのは、私が北海道生まれであるということもあるだろうが、それにしても、北方の風土が人間に与える孤独感に似た、厳しさ、さびしさ、突き放すような寒さ、痛々しい赤色を私は親近感というよりも宿命のように感じとった。

これとても現代の非情とは違うものなのだ。

私は半年ばかりの旅行を通じて、世界は広いと思ひ、人間を今更に不思議なもののように感じ、自分が生きているのは何故かとも幾度か反省し、生きているのは素晴らしいことだと思ひ、死ぬまでには、何か生きていたというあかしが、立てられぬものかなどと考え、確かに一度は死ぬのだと自分にいいきかせている。

(1968. 4. 29)

2
東書

新しい図画工作 新しい美術

北海道に促した小中一貫編集

東京書籍株式会社北海道支社

札幌市南1. 西3. 札石ビル5階 Tel (5) 6594

静かな炉はたて
よい酒を

炉作

札幌南5. 西3 新宿通り
電話(3) 7052